



Title	恵まれた四十年 : 停年退官をむかえるにあたって
Author(s)	大塚, 夏生
Citation	年報いわみざわ : 初等教育・教師教育研究, 15: 100-100
Issue Date	1994-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/8610
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

恵まれた四十年

——停年退官をむかえるにあたって——

大塚夏生

まったく何の気なしに札幌市のある中学校に音楽の教員として奉職したのは昭和29年の4月である。日々生徒達と接するうちに彼等の魅力に次第にとりつかれるようになってしまった。私もまだ若く、人生意気に感じていたためか授業には格別の愛着をもつ幸福な一年間であった。

翌年の春、北大の恩師から急に学芸大学釧路分校へ赴任するようと言われた。ある日当時の学長（田所哲太郎先生）宅に連れてゆかれ、ふかぶかとしたソファに身をせずめながら説得されてしまった。それは私にとって大変不安かつ寂しいことであり、4月初旬ひとり夜汽車にゆられて未だみたこともない釧路へとむかいながら、いつしか手持ちのウィスキーをひとびん呑みほして眠りこんでしまった。翌朝目をさまして先ずおどろいたのは鼻をつんざく磯のにおいである。これは内陸に育った私にはめったに体験できないものであり、地図を開いて見なくとも、もうすぐ目的地につくことがわかったほどである。

駅について改札口をでると旗を掲げた庶務係の菅野氏が出迎えにきており、早速約束してあった城山町の下宿に案内された。当日は天気がよく想像以上に温かかった。荷物をおいて早急に分校へ赴き、主事ほか若干の主だった方々に紹介され、新任地での生活が始まった。ピアノ・レッスンのほか、音楽美学と和声法を開講したため、夢中になって美学書をよみあさり、ノートを作製したものである。そのほか異質の土地故に毎日々々が目新しく、珍しい経験の連続であり、この道東の都市および周辺地域がもつユニークな情調に次第にとけこみ、いつしかどっぷりと漬かってしまった。NHK放送合唱団の伴奏者としてステージ、スタジオそして各地への演奏旅行など数々の楽しい思い出が今もなお鮮かにうかんでくる。そんな幸福にみちたある日、学長が分校主事室に私をよび「きみ、6月には岩見沢分校に来ないかね。親元から通える近い所だよ。君の恩師の遠藤宏教授とも話しはついているから——」とおっしゃる。下をむいたまま思わず「ハイ」と答え、私の岩見沢転勤は数秒のうちに決まった。

岩見沢分校に転任してからは札幌に腰を落着けて音楽活動をつづけ、汽車通勤（最近バス）をつづけ約38年がすぎってしまった。昭和31～36年頃には旧校舎図書館建設資金募集のため幾度となく空知管内の小・中・高校を訪問してピアノ伴奏と独奏に精を出し、かつ道中はいつも学生諸君とのしく語り合ったものである。更に後年始まった年に一度の合宿ゼミは木古内、大滝ほか数か所に亘り、その時もまた真面目な研究発表、討論のほか真夜のアルコールがこれまた大変充実した魅力を発揮して誠に佳い思い出をのこしている。

「大学」という大らかな学舎に身をおいた私の人生は研究時間にめぐまれて多くの書物をよみ、文化財、芸術作品などに接し、かつ海外の大学や研究機関を訪ねる機会を得るなど大変幸福なものであったとおもう。そして唯一度の人生でめぐり逢えた教え子の多くが教育界にあって秀れた業績を残し、また良き家庭人として次の世代を育てあげている事実をかえりみると、私にとって40年にわたる教員生活がどれほど恩恵にみちたものであったかを更めて痛感せざるをえない。そして、斯様な人生が全て周囲の皆さんに支えられてこそ在り得たということに衷心より感謝し、拙文を了えたいとおもう。（音楽学専攻）1994年2月